

マリヤは処女であったか

2009年12月27日 アシェル・イントレーター

マリヤの本当の名前はミリアムです。理論的に言うと、ミリアムがイエシュア(イエス)を生んだ時、彼女は処女ではなく、婚約期間中の処女でした。聖書の律法では、この二つは大きな違いがあります。ミリアムは法的にヨセフと結婚しましたが、まだ肉体的な結びつきはありませんでした。もし彼女が別の男と一緒にいたならば、それは姦淫と見なされ死刑に処せられるのです(申命記 22:23-24)。もし男が婚約していない処女と寝た場合、彼は罰金を払って彼女をめとらなければなりません(申命記 22:28-29)。

法的に、申命記 22 章によりますとミリアムは処女ではなく婚約期間中の処女です。これはいくつかの理由によって重要なことです。まず、ミリアムとヨセフは、死刑が当然であった状況を越えるためには超自然的な神の力を信じなければなりませんでした。

次に、メシアの誕生についてのイザヤの預言では、「処女」という言葉とは違う単語を使っています。

イザヤ 7:14「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

この個所の処女は通常の「betulah ベトゥラー」ではなく、特別な「alma アルマ」を用いています。「アルマ」は聖書のその他の個所では3個所しかありません。

1. 創世記 24:23 で「アルマ」はリベカに使われてほり、処女を指す「ベトゥラー」と同じ意味で使われています。
2. 出エジプト 2:8 で「アルマ」はモーセの姉ミリアムに使われています。彼女もまた処女でした。さらに、彼女の名はまさに「アルマ」であるメシアの母に対する預言的なヒントとなっています。
3. 箴言 30:19 で「アルマ」は男性と関係のある言葉で使われており、すなわち文脈的な意味は結婚した女性と思われれます。しかも、それはメシアと教会(エペソ 5:32)との神秘的な関係をたとえるものなのです。

福音に反対する者で聖書ヘブライ語が分かる人は、イザヤ 7 章はイエシュアを指さないと、すなわちその女性は「アルマ」であり「ベトゥラー」ではないからと主張します。

しかし、預言はイエシュアとぴったり合うのです。

1. 70 人のラビたちによって紀元前 132 年に完成したセプトゥアギンタ(訳注:旧約聖書のギリシャ語訳)はイザヤ 7 章の「アルマ」をギリシャ語の処女を表す「パルセノス」と訳している。

2. 創世記 24 章で「アルマ」は処女という意味である(リベカ)。
3. 出エジプト 2 章でも「アルマ」は処女という意味である(ミリアム)。
4. イザヤ 7 章では「ベトゥラー」を使うことはできなかった、それは、通常の処女ではなく、婚約期間中の処女、すなわち処女であり、法的に一人の男性とつながっているという異なった法的条件を指す特別な言葉でなくてはならなかったからである。
5. イザヤ 7 章は理論的に処女を指し、メシアの誕生は奇跡的なしるしであるとした。
6. イザヤ 7 章の幼子は超自然的な誕生でなければならなかった。それは、彼はまた「神は我々と共にある」エル・インマヌであるからである。

3つの系図

イエシュアに関し3つの系図があります。ヨハネ 1 章は主の神性を扱っています。ルカ 3 章はミリアムを通じた実際の誕生を扱っています。マタイ 1 章はダビデ王からの主の法的な血統を扱っています。

マタイ 1:20-21「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。』」

聖霊の働きによりミリアムの胎内に子が宿りました。ミリアムの働きはその子を出産したことです。ヨセフの働きは彼に名を付けたことです。

これら3つは救いに必要なものでした。イエシュアは神であり聖でなくてはならず、人類の一員として肉体を持つ者でなければならなかったからです。主は地上の政府に対する権威を持つためダビデの契約的な王家の血統を持たねばなりませんでした。

もしミリアムが単なる処女(ベトゥラー)であったならば、イエシュアはダビデの王位に対する法的な権利を持つことはできなかったでしょう。もしミリアムが通常の結婚による受胎であったならば、イエシュアは私たちが救うための神の力を持つことはできなかったでしょう。それゆえ、神はトーラーにある項目を設けました。それは婚約期間であり、法的には結婚しているが、受胎が起らない期間です。主がそうされたのは、通常ではない機会という枠組みを作るためでした。ミリアムは処女ではなく、婚約期間中の処女であり、御子を産み、その霊は神であり、肉体は人であり、法的には神の御国の王位継承者なのです。これらの項目に合わせるため、主は異なった言葉「アルマ」を用いたのです。

ミリアムとヨセフは二人ともダビデの血統です。イエシュアはイスラエル生まれのイスラエル人であり、ベツレヘムに生まれ、エルサレムで割礼を受け、ガリラヤで育ちました。主は中近東の人であり、恐らく肌の色は濃かったでしょうし、トーラーの戒めを守っていました。

私たちの民の中には私たちの信仰をあざける者がいて、処女からは誰も生まれてこないと言います。私は「あなたはトーラーを信じますか。もしそうならば、アダムの創造をあなたは信じますか。もしそうならば、泥から人を創るのと、処女が子を産むのとどちらが難しいですか。」と尋ねます。

イサクは超自然的に生まれ、サムソンも、サムエルもそうでした。ましてや私たちがメシアの超自然的な誕生を期待するのは当然ではないでしょうか。

どのような神なのでしょう

神はご自身を人類に現す際、人類が理解できる方法を取られました。イエシュアは女性の胎内から生まれました。一体どのような神がそうなさるのでしょうか。神は私たちと近く、友情を結びたいと思っておられるのです。イエシュアに神を見ないどのような人や宗教は、神がどれほど親密であることや私たちの人生の各部分に関わることに全力を捧げられておられることを十分に理解することができないでしょう。

エデンの園を歩かれた同じ神一人である方がマムレでアブラハムを訪問し、私たちを愛するがゆえに主はこの世に人間の赤子としてお生まれになりました。主は私たちのようになったことで、私たちも主のようになるのです。その赤子に神の究極的な啓示と究極的な人に対する神のご計画があるのです。イエシュアの誕生に、神性と人が一つとなるのです。